

# 老いと向き合う

石川囲碁同好会 石川幌二

コロナ禍で録画した映画やドラマを見る機会がありました。

その中で印象に残ったのは、江戸時代の浮世絵師、葛飾北斎についてです。有名な絵は富嶽三十六景など多数あり、江戸時代では長寿の90歳まで生き、絵は年齢と共に上達し晩年の方が高い評価を得ています。亡くなる時、北斎は「天が命を後5年くれたら本当の絵描きになることが出来る」と語っています。

老いと向き合うには趣味を持つことが良いと言われ、今は多くの方が様々な趣味を楽しんでいます。私も趣味で囲碁とゴルフをしています。もう齢だとか、体調が悪いとか、言い訳して上達することもなく続けているのが現状です。特に最近はコロナで囲碁の対局の機会も少なく、ゴルフもコースに出る機会が少なくなっています。

それでも時々、もう少し何か出来ることはないかと思ひ、囲碁はパソコンの囲碁ソフトを工夫しながら使えばどうか、ゴルフは狭い場所でも出来る素振りを繰り返せば、など試行錯誤を続けています。効果は分かりませんが、その様な気持ちを持つことも、老いと向き合う方法の一つと思っ



富嶽三十六景 東海道江尻田子の浦

います。

葛飾北斎は自身の過去の作品には目もくれず、高齢になっても常に良い作品を画こうとしていた様で、亡くなる3か月前に「富士越龍図」という名作を残しています。老いとの向き合い方は人により様々でしょうが、北斎の生き方からは、老いとの向き合い方の一例を見ることが出来ました。

(八碁連だより巻頭言 令和3年11月 第361号)